

日本語の心理動詞のテンス・アスペクト的特徴による分類

Classification of Japanese Psychological Verbs by Tense-Aspect Characteristics

王 雲姣
YUNJIAO, Wang

摘要

This paper considers the characteristics of Japanese psychological verbs from the perspective of tense and aspect. Kudo (1995) classified Japanese verbs into three categories: external motor verbs, internal emotional verbs (corresponding to "psychological verbs" in this paper), and static verbs. And then divided internal emotional verbs into four parts: thinking verbs, emotional verbs, sensory verbs, and perceptual verbs. However, some verbs that belong to the emotional verb or the sensory verb have different properties from the viewpoint of tense and aspect. For example, Kudo (1995) classifies both "*Nayamu*" and "*Yorokobu*" into the emotional verb, but "*Nayamu*" expresses the current emotion in the *Ru* form, while "*Yorokobu*" does not express the current emotion in the *Ru* form. And Kudo (1995) classifies both "*Sibireru*" and "*Itamu*" into the sensory verb, but "*Sibireru*" expresses the current emotion in the *Ta* form, while "*Itamu*" does not express the current emotion in the *Ta* form. In addition, Yoshinaga (2008) and Yamaoka (2000) also classifies psychological verbs, but the classification criteria are ambiguous and inadequate. Therefore, in this paper, we classified psychological verbs into six types from the viewpoint of tense and aspect. And We concluded that psychological verbs are not homogeneous in terms of tense and aspect, but are variants with multiple types.

キーワード：心理動詞 テンス アスペクト 分類

Keywords: psychological verbs, tense, aspect, classification

1. はじめに

本稿は日本語の心理動詞の特徴についてテンス・アスペクトの観点から考察するものである。工藤（1995）は日本語の動詞を外的運動動詞、内的情態動詞（本稿の「心理動詞」に相当する）、静態動詞の三つに分類し、このうち内的情態動詞をさらに意味特徴から思考動詞、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の四つに分けている。しかし、同じ感情動詞や感覚動詞などの中にもテンス・アスペクトの観点から性質が異なるものが混じっている。例えば、工藤（1995）は「悩む」

と「心配する」を同じ感情動詞に分類しているが、(1)のように「悩む」はル形で現在の感情を表すのに対し、「喜ぶ」はル形で現在の感情を表さない。また、工藤(1995)は「痺れる」と「痛む」を同じ感覚動詞に分類しているが、(2)のように「痺れる」はタ形で現在の感情を表すのに対し、「痛む」はタ形で現在の感情を表さないという違いがある。

(1)「ああ、悩む／*心配する」

(2)「ああ、足が痺れた／*頭が痛んだ」

この他、吉永(2008)や山岡(2000)も心理動詞の分類を行っているが、後述するように分類基準が曖昧で不十分なところがある。そこで本稿ではテンス・アスペクトの観点から心理動詞を六つのタイプに分類する。

2. 先行研究とその問題点

本節では日本語の心理動詞の分類に関する先行研究を検討し、先行研究の問題点を述べたうえで、本稿の研究課題を提示する。日本語の心理動詞の分類について、先行研究では主に意味特徴、文機能、テンス・アスペクトなどの観点から行っている。

まず、意味特徴による分類について見る。1節で述べたように、工藤(1995)は意味特徴から心理動詞を思考動詞、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の四つに分けているが、具体的な分類基準は述べていない。吉永(2008)は意味特徴から思考認識的心理動詞、感情的心理動詞、知覚感覚的心理動詞の三つに分けており、次のように説明している。

①思考認識的心理動詞—思う、考える、疑う、信じる、分かる、覚える

〈思考認識〉…知的な精神活動。目的を伴うことが多く、能動的、意志的。

②感情的心理動詞—悩む、困る、あきれ、あせる、悲しむ

〈感情〉…色々な精神状態、心理的作用。(喜怒哀楽、好き嫌い、高揚・落胆など)

③知覚感覚的心理動詞—痛む、痺れる、震える、音がする

〈知覚感覚〉…感覚器官からの刺激により感知される神経作用。具体的。

しかし、先の工藤(1995)と同様に同じ思考認識的心理動詞でも「あっ、分かった」とは言えるが、「*あっ、思った」とは言えないというような違いがあるため、吉永(2008)の三分類もさらに検討する必要がある。

次に、文機能による分類について見る。山岡(2000)は文機能の違いから感情動詞(本稿の「心理動詞」に相当する)を感情表出動詞、感情変化動詞、感情描写動詞の三つに分けている。まとめると、次のようになる。

A 感情表出動詞—ル形で感情表出という文機能を表す動詞。考える、懂れる、めいるなど。

〈感情表出〉：話者が発話時の自らの感情を表出する文機能

B 感情変化動詞—タ形で感情表出を表す動詞。あきれ、驚く、疲れるなど。

C 感情描写動詞—ル形でもタ形でも感情表出を表さない動詞。怒る、嫌うなど。

〈感情描写〉：感情の動きを客観的に描写するという文機能

山岡（2000）はこの三分類と意味特徴による四分類を組み合わせ、次の表1のようにまとめている。

表1 山岡（2000）における心理動詞の分類

感情動詞	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚
A 感情表出動詞	A1 思考表出 ～ト／ク思う	A2 情意表出 困る	A3 感覚表出 胃ガ痛む	A4 知覚表出 見える
B 感情変化動詞	B1 思考変化 ひらめく	B2 情意変化 あきれる	B3 感覚変化 肩が凝る	
C 感情描写動詞	C1 思考描写 ～ヲ思う	C2 情意描写 怒る	C3 感覚描写 顔がほてる	C4 知覚描写 見る

（表1は山岡（2000：178）の表1を修正したものである。）

しかし、山岡（2000）は上の表1の分類以外に、「音がする」「声がする」「ゴワゴワする」「ザラザラする」などの動詞を「〈演述系〉の知覚状態動詞文」と呼び、同じカテゴリーに入れているが、「音がしている」「声がしている」は話し手の知覚を表すのに対し、「ゴワゴワしている」「ザラザラしている」は対象の属性を表すため、両者は分けて考える必要がある。

最後に、テンス・アスペクトの観点からの分類を見る。工藤（1995）では、心理動詞全般のテンス・アスペクトについて考察している。まず、ル形の場合は（3）のように人称制限があり、三人称には基本的に使えないと述べている。

（3） a. わたし、父は死ぬと思うわ。 （工藤 1995：70）

b. 父は、死ぬと思っているわ。 （工藤 1995：70）

また、ル形は次の（A1）のように能動的な〈態度表明文〉と（A2）のように受動的な〈感情・感覚表出文〉となると述べている。

（A1）〈（能動的）態度表明性／現在〉

（4）「試験も1つの目標として、あっていいと、僕は考えるな」 （工藤 1995：91）

（5）「もちろん、信じます」 （工藤 1995：91）

（A2）〈（受動的）表出性／現在〉

（6）「お前の馬鹿にも呆れるね」 （工藤 1995：91）

（7）「イサノ、水をくれ。喉がやたらと渴く」 （工藤 1995：91）

次に、タ形の場合は（8）のように、ル形と同様に一人称に限定されると述べている。

（8） a. わたし、あの時は、驚きました。 （工藤 1995：70）

b. あの時は、先生も、驚いていました。 （工藤 1995：70）

また、（B1）のように過去を表す〈確認・記述文〉の場合と、（B2）のように現在を表す〈表出文〉の場合があると述べている。

（B1）〈直接経験の確認・記述／過去〉

(9) 「のんきだねえ。東京へ飛び出して、ずいぶん心配したよ」 (工藤 1995 : 92)

(10) 「あとで迷惑をかけたのではないかと後悔しました」 (工藤 1995 : 92)

(B2) 〈表出性／現在〉(一語文的)

(11) 「まあ、呆れた!よくそんな勝手なことが言えるわね」 (工藤 1995 : 92)

(12) 「喉が渴いたわ。食堂車で何か冷たいものでも飲みましょうよ」 (工藤 1995 : 92)

最後に、テイル／テイタ形の場合は、(13)～(16)のように人称から解放された〈確認・記述文〉となっていると述べている。

〈一人称〉

(13) 「わたし、疲れてます。もう、そろそろ休ませて戴くわ」 (工藤 1995 : 92)

(14) 「ええ、あの時は、旧式な結婚をけいべつしていました。そして、なにかもっといいものがあつたら、と思つていました」 (工藤 1995 : 92)

〈二・三人称〉

(15) 「いつ帰つた?」「昨夜です」「ひどく疲れてるな」 (工藤 1995 : 92)

(16) 「どうしたの?越した先がわからなくて、連絡も出来ないって、佐山先生の奥さんが心配してらしたよ」 (工藤 1995 : 92)

しかし、工藤(1995)は「軽蔑する」「悩む」などの感情動詞と、「心配する」「喜ぶ」などの感情動詞を同じル形で能動的な〈態度表明文〉または受動的な〈感情・感覚表出文〉を表すカテゴリーに入れているが、(17)のように「軽蔑する」はル形で〈態度表明文〉を表すのに対し、「心配する」はル形で〈態度表明文〉を表さない。また、(18)のように「悩む」はル形で〈感情表出文〉を表すのに対し、「喜ぶ」はル形で〈感情表出文〉を表さない。このように、工藤(1995)の感情動詞には異なる性質のものが混じっている。

(17) (目の前の相手に対して)「あなたのことを{軽蔑します／*心配します}」

(18) 「ああ、{悩む／*喜ぶ}」

以上、心理動詞の分類に関する先行研究について見てきた。上に述べたように、先行研究には次のような問題点がある。まず、工藤(1995)と吉永(2008)は意味特徴から心理動詞を分類しているが、同じ感情動詞や感覚動詞などであってもテンス・アスペクトのとり方に違いが見られる。次に、山岡(2000)は文機能から分類しているが、テイル形の表す意味が異なった心理動詞を同じカテゴリーに入れているため、テンス・アスペクトの観点から見直す必要がある。最後に、工藤(1995)はテンス・アスペクトの観点から分析しているが、ル形で〈態度表明文〉や〈感情・感覚表出文〉を表すものと表さないものを同じ分類に入れているため、再分類する必要がある。

そこで、本稿では先行研究を踏まえたうえで、心理動詞をテンス・アスペクトの観点から改めて考察し再分類を行う。

3. 本稿における心理動詞の分類

本稿で考察対象とする語は工藤（1995）と山岡（2000）で挙げられた心理動詞 154 語である。このうち、思考動詞は 20 語、感情動詞は 78 語、感覚動詞は 31 語、知覚動詞は 25 語となる。本稿では、コーパスの実例に基づいて、心理動詞がル形、タ形、テイル／テイタ形でどのような意味機能を表す文を構成するかによって心理動詞を分類した。その結果を表 2 に示す。

表 2 本稿における心理動詞のテンス・アスペクト体系

動詞の種類・語例・語数		テンス・アスペクト		アクチュアル(個別時)な事態					
		一人称			三人称 ⁽¹⁾			ポテンシャル(潜在時)な事態	
		スル	シタ	シテイル／シテイタ	スル	シタ	シテイル／シテイタ	スル	シテイル
I	感情:恐れる等(9) 感覚:頭痛がする(1)	※ 仮定(未来) (未来の自分を客観視する場合も含む)	確認・記述(過去)						
II	思考:思う等(16) 感情:恨む等(42) 感覚:疼く等(21) 知覚:感じがする(2)	①仮定(未来) ②表出(現在)	確認・記述(現在／過去)	仮定 ⁽²⁾ (未来)	×	確認・記述(現在／過去)	確認・記述(属性)	×	
III	思考:ひらめく等(3)	仮定(未来)	①確認・記述(過去) ②表出(現在)						
IV	思考:分かる(1) 感情:驚く等(25) 感覚:渴く等(9) 知覚:見える等(3)	①仮定(未来) ②表出(現在)	確認・記述(過去)						
V	知覚:音がする等(6)		確認・記述(過去)						
VI	知覚:ザラザラする等(14)							確認・記述(属性)	

表 2 のように、本稿はアクチュアル（個別時）な事態とポテンシャル（潜在時）な事態を分けてテンス・アスペクトを検討している。工藤（1995）では、アクチュアルな事態は、動作や状態が特定の時間に現れることを意味するのに対し、ポテンシャルな事態は、時間の特定性が捨象され、その主体が潜在的にその動作・状態を持っているということの意味すると指摘している。また、工藤（1995）はアクチュアルな事態（〈一回性・多回性〉を持つ事態）、アクチュアル・ポテンシャルな事態（〈反復性〉を持つ事態）、ポテンシャルな事態（〈属性〉を持つ事態）の三つに分けているが、アクチュアル・ポテンシャルな事態（〈反復性〉を持つ事態）はすべての心理動詞がル形とテイル形で成り立つため、本稿では考察しないこととする。

さらに、文の意味機能については、工藤（1995）と山岡（2000）を参考にして次のように定めている。

- ① 仮定：まだ現実化されていない未来の心理活動を仮想する意味機能。
- ② 表出⁽³⁾：話者が発話時の自らの心理活動を吐露する意味機能。
- ③ 確認・記述：過去または現在の心理活動を客観的に表す意味機能。

次節から、心理動詞のテンス・アスペクトの各タイプについて詳しく見る。

4. アクチュアル（個別時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴

本節では、アクチュアル（個別時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴について例を挙げながら考察する。

4. 1. タイプ I

まず、タイプ I について見る。タイプ I の心理動詞は表 3 に示すように、「惜しむ」「恐れる」などの感情動詞 9 語と感覚動詞「頭痛がする」の 1 語がある。

表 3 タイプ I の心理動詞

種類	語彙リスト
感情動詞	惜しむ、恐れる、悲しむ、苦しむ、悔やむ、後悔する、心配する、楽しむ、喜ぶ(9 語)
感覚動詞	頭痛がする(1 語)

このタイプの心理動詞はル形で未来に対する〈仮定〉を表し、タ形で過去に対する〈確認・記述〉を表し、テイル/テイタ形で現在または過去の〈継続性〉に対する〈確認・記述〉を表す。まず、ル形の場合は一人称と三人称の未来の感情を〈仮定〉する。例えば、「悲しむ」は(19)のように一人称の「私」の未来の感情に対する〈仮定〉を表すこともできるし、(20)のように三人称の「忠隆」の未来の感情に対する〈仮定〉を表すこともできる。ただ、(19)のように「悲しむ」「喜ぶ」「惜しむ」などの動詞は一人称の未来の感情を表していても、話し手が未来の自分を客観視して別人格のように扱っていると思われる。また、(21)のように「恐れる」「惜しむ」などは三人称の未来の感情を表す場合、ル形だけでは成り立ちにくく、「だろう」「でしょう」などのモダリティ表現を必要としている。

(19) よかったな昨夜、お前が死んで悲しむ奴が、1人は居たってことだ」「……2人いるわ」「じゃあ、3人だな。――私も悲しむぜ、多分な」魔理沙が曖昧に、笑ったような顔をしながら言った。
(www.pixiv.net/novel/show.php?id=210938⁽⁴⁾)

(20) 「細川家の証人はわたしです。あなたが死んでも、なんにもなりませんよ」「でも、もう決めたことですから」「忠隆が悲しみますよ」 (『群雲、関ヶ原へ』岳宏一郎)

(21) 「なぜなら国民は、減税によって今受け取ったお金が、将来の増税によって『没収されるだけ』だと恐れるだろうから」と(実証ではなく理論に基づいて)論じています。

(『リフレが正しい。FRB 議長ベン・バーナンキの言葉』高橋洋一)

次に、タ形の場合は一人称の過去の感情に対する〈確認・記述〉を体験的に表す。例えば、(22)では「俺」の過去の感情に対する〈確認・記述〉を体験的に表している。それに対し、(23)では「山椒魚」を擬人化すると同時に、工藤(1995)で論じているように話し手が三人

称「山椒魚」に感情移入してその心理活動を一人称のように体験的に記述する。このような三人称の場合、小説の地の文には現れるが、会話文には現れない。本稿ではこのような感情移入の場合を対象外とする。

(22) 「俺だって本当に怒ったし、悲しんだよ」と本音を漏らしながらも、「各々が反省することでしょう」と現在の思いを語った。 (www.cinematoday.jp/news/N0083423)

(23) 山椒魚は悲しんだ。 (『山椒魚』井伏鱒二)

最後に、テイル／テイタ形の場合は一人称と三人称の現在または過去の感情の〈継続性〉についての〈確認・記述〉を客観的に表す。例えば、「悲しんでいる」は(24)では「猴王」自身の現在の感情、(25)では「神様」の現在の感情を表している。また、「悲しんでいた」は(26)では「私」の過去の感情、(27)では「奥さん」の過去の感情を表している。

(24) あわてたサルども、(中略)「大王さま、なにをそんなにお悲しみで？」とたずねるものですから、猴王、「こうしてたのしんでいても、ちょっとさきのことを考えるとなあ。それで悲しんでおるのだよ」 (『西遊記』呉承恩(著)/中野美代子(訳))

(25) 「(前略)そして、なによりも、E子さんのことを大好きな神様が悲しんでいますよ」 (『斎藤一人 神様にかわいがられる豊かで幸せな生き方』斎藤一人、高津りえ)

(26) そんな時、「なんで私は悲しんでいたのだろう？」と考えます。

(『小さなことで感情をゆさぶられるあなたへ』大嶋信頼)

(27) 「(前略) 奥さん、悲しんでたわよ。それにあなたのことすごく怒ってて、すごく心配もしてた。(後略)」 (『悪徳小説家』ザーシャ・アランゴ(著)/浅井晶子(訳))

また、次の(22')のように(22)の「悲しんでおる(いる)」の前に「さっきから」「昨日から」などの時間幅を表す副詞的成分が来ても意味がほぼ変わらないことから、テイル形は一定の時間幅を表し、即ち継続性を表すことが分かる。

(22') 「それでさっきから／昨日から悲しんでおるのだよ」

金水(1989)は次の(28)を挙げながら、ここの「悲しんでる」を、①〈悲しい〉という心的状態、②悲しげな表情や動作、③「ああ、悲しい」などの発話行為、という三つの相の重なりとして捉え、外部から観察された情報を含んだ報告内容としている。さらに、金水(1989)を踏まえ、定延・メンシコフ(2006)は一人称の心理動詞のテイル形は話し手自身の心理状態を「客観的に」「第三者のように」述べたものとしている。このように、テイル形は一人称の場合でも三人称の場合でも客観性を持っていることが分かる。

(28) 「山田は、どうしてる?」「うん、ひどく悲しんでる」 (金水 1989: 123)

4. 2. タイプⅡ

次に、タイプⅡについて見る。タイプⅡの心理動詞は表4に示すように、「祈る」「疑う」などの思考動詞16語、「憧れる」「頭に来る」などの感情動詞42語、「痛む」「うづく」などの感

覚動詞 21 語、「感じがする」「気配がする」など知覚動詞 2 語がある。

表 4 タイプ II の心理動詞

種類	語彙リスト
思考動詞	祈る、疑う、思う、確信する、考える、期待する、見当がつく、察する、察しがつく、信じる、推察する、推測する、想像がつく、判断する、願う、望む(16 語)
感情動詞	憧れる、怒り(嫌悪感)を覚える、イライラする、ウキウキする、恨む、うんざりする、感謝する、関心(興味)がある、感心する、カリカリする、気が急ぐ、気が立つ、気が咎める、気が晴れる、気になる、緊張する、敬服する、軽蔑する、心が痛む、心が和む、嫉妬する、白ける、じれる、癩に障る、ゾクゾクする、ゾッとする、照れる、同情する、鳥肌が立つ、悩む、憎む、恥じる、腹が立つ、ハラハラする、はらわたが煮えくり返る、反省する、むかつく、ムシャクシャする、めげる、滅入る、妬ける、ワクワクする(42 語)
感覚動詞	痛む、うずく、ガクガクする、カサカサする、ガンガンする、キリキリする、グズグズする、クラクラする、(目)がくらむ、ゴロゴロする、ショボショボする、ズキズキする、(背筋が)ゾクゾクする、チカチカする、チクチクする、(胸が)ドキドキする、ヒリヒリする、震える、ほてる、ムカムカする、ムズムズする(21 語)
知覚動詞	感じがする、気配がする(2 語)

このタイプの心理動詞はタイプ I に似ているが、一人称のル形の場合は未来に対する〈假定〉だけでなく、現在における〈表出〉を表すこともできる。まず、ル形の場合、一人称は現在の心理活動の〈表出〉と未来の心理活動に対する〈假定〉を表すのに対し、三人称は未来の心理活動に対する〈假定〉のみ表すという違いがある。例えば、感情動詞「感謝する」は(29)では話し手の発話時における感情の〈表出〉、(30)では話し手の未来の感情に対する〈假定〉、(31)では三人称「このお嬢さん」の未来の感情に対する〈假定〉を表している。

(29)「助かるわ。感謝します」 (『ニーベルングの城』宇神幸男)

(30)「もし君が、あの人たちに生活できるようにしてくれたら、感謝します……」

(『大陸問題』(第 16 卷)大陸問題研究所)

(31)「お母さん、このお嬢さんがお嫁に行く時、この写真を見て、ああ、昔からお母さんは優しかった、こんなに私を大切にしてくれていたんだ…と、きっと感謝しますよ。」

(『三田商学研究』第 35 卷、第 4~6 号 慶應義塾大学商学会)

次に、タ形の場合はタイプ I と同様に一人称の過去の態度や感情・感覚を体験的に記述する。例えば、「感謝した」は(32)では話し手の過去の感情を体験的に表している。

(32)「私は全く感謝しました。第一は、ほかの被告がみな無罪になったこと、第二は、私についても思いがけぬ寛大な判決だったこと。公正な裁判だったと思っています」

(『三鷹事件—1949 年夏に何が起きたのか』片島紀男)

最後に、テイル/テイタ形の場合もタイプ I と同じように一人称と三人称の現在または過去の思考・感情・感覚の〈継続性〉に対する〈確認・記述〉を客観的に表す。例えば、「感謝している」は(34)では話し手、(35)では三人称「かれら」の現在の継続的な感情を記述している。また、「感謝していた」は(36)では一人称「綾子」、(37)では三人称「大岩」の過去の継続的な感情を記述している。

(34)「(略) 借金でどうしようもなくなったこのわたしを、間宮さんも宇野さんも見捨てなかった。本当に感謝してますよ」 (『インサイダー』渡辺房男)

- (35) 「個人的な恩顧を受けたことに対して、かれらは自分たちの日本人教師に感謝していま
すね」(『ラフカディオ・ハーン著作集』ラフカディオ・ハーン(著)/平川祐弘(訳))
- (36) 雄二は東大卒。一方、綾子は高卒。「どうして私なんて選んでくれたんだろうって最初
は感謝してました」(gendai.ismedia.jp/articles/-/78986)
- (37) 「私はあなたに感謝してるのよ。あなたの他にも大勢の記者さんが入れ替わり立ち替わ
り自宅に押しかけたけど、書かなかったのはあなただけ。太岩も感謝していたわ」
(『腐った闇ー長篇アンダーグラウンド・ノベル』廣山義慶)

4. 3. タイプⅢ

次に、タイプⅢについて見る。表5に示すように、タイプⅢは「思いつく」「ひらめく」などの思考動詞3語がある。

表5 タイプⅢの心理動詞

種類	語彙リスト
思考動詞	思いつく、気がつく、ひらめく(3語)

このタイプの心理動詞はタイプⅡと違い、ル形ではなくタ形で一人称の発話時における心理活動の〈表出〉を表す。まず、ル形の場合は一人称と三人称の未来の心理活動を〈仮定〉する。例えば、(38)の「思いつく」は話し手「伯母」の未来の心理活動に対する〈仮定〉を、(39)の「思いつく」は三人称「彼女」の未来の心理活動に対する〈仮定〉を表している。

(38) 伯母がその場にふさわしい言葉を探しながら、長いあいだこちらを見つめていたのを覚えていた。結局、言葉は見つからず、伯母はこうつぶやいただけだった。「そのうち何か思いつくわ」(後略) (『死の記憶』トマス・H・クック/佐藤和彦)

(39) 「彼女にもう少し時間をあげて。そのうち彼女は何か思いつくわ」(作例)

次に、タ形の場合は一人称と三人称の過去の心理活動に対する〈確認・記述〉だけでなく、一人称の発話時における心理活動の〈表出〉を表すことができる。一人称の過去の心理活動を表す場合はタイプⅠやタイプⅡと同様であるため、ここでは略す。一人称の現在の心理活動の場合は(40)の「思いつく」のように話し手「辰三」の発話時点における心理活動を表出している。

(40) すると、辰三がきゆうに顔をあげ、「いいことを思いついたぞ。これはおもしろいぞ！」と言って、腕ぐみをしました。(『星をまく人』竹田弘)

最後に、テイル/テイタ形の場合は一人称と三人称の現在または過去の継続的な心理状態を客観的に記述するが、タイプⅠとタイプⅡと違い、心理活動の進行局面の継続性ではなく、結果状態の継続性を表すと思われる。例えば、タイプⅠの「悲しんでいる」は上の(24)のように「悲しみ始め」た後の進行局面を表しているのに対し、「思いついている」は(41)のように

「思いついた」結果としての状態の持続を表している。(42)～(44)も同様である。

(41)「(前略) 私、あることを思いついていますの、やっと、私のとるべき道がはっきりわかりましたの」
(『潮』第13～18号 潮出版社)

(42)「でも華さん。梶さんが思いついてるんですよ？」玄が言う。(『成金』堀江貴文)

(43)「年齢階段に沿って首をずらす方法は俺も思いついていましたけど、それを忘れるくらい両角さんは迫力がありました」
(『あと十五秒で死ぬ』榊林銘)

(44)それは「先人は思いついていたが誰もやる必要性を感じなかったため、やらなかった」のである。
(www.amazon.co.jp/hz/reviews-render/lighthouse/B009MIDSP0?filterByKeyword=%E6%94%B9%E5%A4%89&pageNumber=)

4. 4. タイプIV

次に、タイプIVについて見る。タイプIVの心理動詞は表6に示すように、思考動詞「分かる」の1語、「あきあきする」「飽きる」などの感情動詞25語、「痺れる」「疲れる」などの感覚動詞9語、「見える」「聞こえる」などの知覚動詞3語がある。

表6 タイプIVの心理動詞

種類	語彙リスト
思考動詞	分かる(1語)
感情動詞	あきあきする、諦める、飽きる、呆れる、焦る、頭に来る、安心する、いやになる、驚く、ガッカリする、感動する、幻滅する、困る、懲りる、サッパリする、スッキリする、スツとする、せいせいする、退屈する、たすかる、腹が決まる、びっくりする、ホツとする、まいる、弱る(25語)
感覚動詞	(のどが) 渴く、くたびれる、(肩が) 凝る、痺れる、(お腹が) 空く、疲れる、(足が) つる、(頭が) のぼせる、(腹が) 減る(9語)
知覚動詞	見える、聞こえる、感じる(3語)

このタイプの心理動詞はタイプIIIと似ているが、一人称のル形は未来に対する〈假定〉だけでなく発話時点における〈表出〉も表す点で異なる。まず、ル形の場合、一人称は現在の心理活動の〈表出〉と未来の心理活動に対する〈假定〉を表すのに対し、三人称は未来の心理活動に対する〈假定〉を表す。例えば、「感動する」は(45)では話し手の発話時点における感情表出、(46)では一人称「僕」の未来の感情に対する〈假定〉、(47)では三人称「染五郎」の未来の感情に対する〈假定〉を表している。

(45)「いろいろの場所に『貼り紙』が沢山あって変わったペンションですね。でも心配りがあってとても感動します」
(『ペンションを継ぐ!』という君へ』神田清剛)

(46)「僕は女の子の家に呼ばれてあげたてのコロッケが出てきたら⁵⁾感動するけどね。(略)」
(『村上春樹全作品』村上春樹)

(47)「いま初めのほうだけを拝見したんだけど、すごいね、これ。染五郎もきっと感動しますよ。いや、たいへんな労作だ。(後略)」
(『演劇界』第59巻 日本演劇社)

次に、タ形の場合はタイプIIIと同様に一人称の過去の心理活動に対する〈確認・記述〉だけ

でなく、一人称の現在の心理活動の〈表出〉を表すこともできる。一人称の現在の心理活動を表出する場合、(48)の「感動した」のように話し手「予備校生」の心理活動をそのままその場で吐露している。

(48)「鈴木さん、お話感動しました」。演説後、(筆者注：鈴木さんの)周囲を予備校生が取り囲む。(『夕刻のコペルニクス』鈴木邦男)

最後に、テイル／テイタ形の場合はタイプⅢと同様に一人称と三人称の現在または過去の継続的な心理状態を客観的に記述する。例えば、(49)の「感動している」は話し手が「感動していない」という局面から「感動した」という局面に変化した後の結果状態を表している。(50)～(52)も同様である。

(49)「お、おれは今、もうれつに感動している」飛雄馬が、マウンド上、心の中でそう呟いている。(『巨人の星』に必要なことはすべて人生から学んだ。あ。逆だ。』堀井憲一郎)

(50)「1つのディスプレイ環境の中で Creative Cloud の各作業が完結し、生産性が非常に高い。しかも値段を聞いて驚いた。個人的に買いたいし、アドビの製品担当者も感動している」(www.itmedia.co.jp/pcuser/articles/1403/04/news106_2.html)

(51)「……辛かった?」「違います。あの、言葉にしたら私って意外と頑張れるんだなって気付いて……自分に感動していました」(『旦那様、甘く甘く囁いて』深森ゆうか)

(52)「ありがとう。君の姉さんのおかげだ」(中略)「姉も一感動してました。(後略)」(『恋占い』赤川次郎)

このように、タイプⅣの心理動詞はル形、タ形、テイル形の三形式がいずれも一人称の現在の心理状態を表すことができるが、いくつかの点で異なっていると思われる。まず、テイル形の場合は4.1節で述べたように、一人称を三人称のように客観的にその継続的な心理状態を描出し、〈確認・記述〉という意味機能を表すのに対し、ル形とタ形の場合は話し手自身の発話時点における心理状態をそのまま吐露し、〈表出〉という意味機能を表す。次に、ル形もタ形も〈表出〉を表すが、コーパスの用例数から見ると、〈表出〉に使われる場合、ル形に比べてタ形の出現率のほうが圧倒的に高い。また、(53)のように、工藤(1995)や山岡(2000)が述べているとおり、ル形は「一語文的」な形式が少ないのに対し、タ形は感情の極めて直接的な〈表出〉であるためか、「一語文的」な形式が非常に多いという違いが見られる。

(53) a. 「お前の馬鹿にも呆れるね」(=6)

b. 「まあ、呆れた！よくそんな勝手なことが言えるわね」(=11)

4. 5. タイプⅤ

次に、タイプⅤについて見る。タイプⅤは表7に示すように、「音がする」「声ができる」などの知覚動詞6語がある。

表7 タイプVの心理動詞

種類	語彙リスト
知覚動詞	音がする、声がする、ジメジメする、鼻をつく、ブンブンする、ムンムンする(6語)

このタイプの心理動詞は上のタイプI～IVと違い、経験者格が文に現れない。その代わりに、一人称経験者格は潜在的に存在しており、三人称経験者格は潜在的にも存在しない。例えば、(54)(55)のように、タイプIVの「聞こえる」は経験者格(「私に」「彼に」)が文に現れることができるのに対し、タイプVの「音がする」は経験者格が文に現れない。また、(56)のように経験者格が文に現れないとき、必ず一人称の知覚を表すため、タイプVの心理動詞は一人称の知覚を表し、三人称の知覚を表さない。

(54) 私には妙な音が {聞こえる／^{??}する}。

(55) 彼には妙な音が {聞こえている／^{??}している}。

(56) 妙な音が {聞こえる／する}。(一人称)

テンス・アスペクトについて見ると、まず、ル形の場合は話し手の現在の知覚〈表出〉と、未来の知覚に対する〈假定〉を表す。例えば、(57)の「音がする」は話し手の現在の知覚を表出しており、(58)の「音がする」は話し手「ならの木」の「枝にぶらさげた」時という未来時に対する〈假定〉を表している。

(57) 「うしろで、ボン、ボンて音がするのよ」「笹山のおじさんが鉛、じゃなくて銅の弾でノックしてるんだよ」 (『なで肩の狐』花村萬月)

(58) 「鈴がいいかな。枝にぶらさげたら、いい音がするよ」ならの木はうれしくて、またさらさらと青い若葉を鳴らしました。 (『日本児童文学』第52巻 児童文学者協会、)

次に、タ形の場合は一人称の過去の知覚を体験的に記述する。例えば、(59)の「音がした」は話し手の過去の「ジージーと軽い静かな音がした」という知覚体験を記述している。

(59) 「その箱に、そっと顔をよせると、香料の利いたミシン油の臭いが軽く鼻をつき、手廻しのとってをまわすと、ジージーと軽い静かな音がした」 (『文章読本』丸谷才一)

最後に、テイル／テイタ形の場合はタイプI・IIと同様に、一人称の現在または過去の継続的な知覚の進行局面を客観的に記述する。例えば、(60)の「音がしている」は「音がし始め」たあとの「音がし続ける」という進行局面を表している。(61)も同様である。

(60) 「ここから海が見えるんです」とわたしは言った。「夜になると暗くて、真っ黒にしか見えませんが。今も少し、波の音がしています」 (『一角獣』小池真理子)

(61) 翌日、というかその日、昼前になってシーツの袋から這い出した私は、さっそくとなりの青年に、「ゆうべなにやら音がしていたが」と切り出した。(『文学』岩波書店)

4. 6. タイプVI

最後に、タイプVIの心理動詞について見る。表8に示すように、タイプVIは「味がする」「ザラザラする」などの知覚動詞14語がある。

表8 タイプVIの心理動詞

種類	語彙リスト
知覚動詞	味がする、香りがする、ゴワゴワする、ザラザラする、スベスベする、ツルツルする、手触りがする、匂いがする、匂う、ヌルヌルする、ネトネトする、ネバネバする、ベタベタする、ベトベトする(14語)

このタイプの心理動詞はアクチュアル（個別時）な事態においてはタイプVと同様である。まず、ル形の場合は話し手の現在の知覚〈表出〉と、未来の知覚に対する〈仮定〉を表す。例えば、「ベトベトする」は(62)では話し手の現在の知覚〈表出〉、(63)では一人称「甚」の「雨が降ったら」という実現されていない未来の知覚に対する〈仮定〉を表している。

(62) 「ベトベトする～も～ポテトチップス食べたら、拭いてからやってよ～」

(Yahoo!ブログ)

(63) 甚「やったことあるのか」女「へえ、けどあれはうるそうおまんナア。もう風が吹いたら目へ入るし、雨が降ったらベトベトするし、髪についたらややこしいてどうもならん」

(『米朝落語全集』桂米朝)

次に、タ形の場合は一人称の過去の知覚に対する〈確認・記述〉を表す。例えば、(64)の「ベトベトした」は「稲葉篤紀外野手」自身の過去の知覚を体験的に記述している。

(64) 本ハム稲葉篤紀外野手 (39) が (中略) 袖を通した名球会ブレザーの着心地について聞かれると「若干、汗をかいていたので…ベトベトしました」と笑いを誘っていた。

(www.nikkansports.com/baseball/news/f-bb-tp0-20120523-955875.html)

最後に、テイル/テイタ形の場合は一人称の現在または過去の継続的な知覚の進行局面を客観的に記述する。例えば、(65)の「ベトベトしている」は話し手が「キッチン」に接触して「ベトベトする」と感じ始めるという開始局面から、「ベトベトした」という完了局面までの間の知覚の進行局面を表している。(66)も同様である。

(65) 「吸い込みが弱くなってきた」「最近キッチン全体がベトベトしている」と感じたら、レンジフード、換気扇のお掃除時期かも。

(www.e830.jp/range_hood/)

(66) 「(筆者注：枯れた木の根元の土が)ヘドロのようにベトベトしていました」カリは当時のことを思い出した嫌な顔をした。(『NYの人気セラピストが教える 不満を上手に伝える方法』ガイ・ウィンチ(著)/花塚恵(訳))

5. ポテンシャル（潜在時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴

前節では、アクチュアル（個別時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴を見

てきた。本節では、ポテンシャル（潜在時）な事態における各タイプのテンス・アスペクトの特徴について例を挙げながら考察する。

まず、タイプ I～IV について見る。ポテンシャル（潜在時）な事態において、タイプ I～IV の心理動詞はル形で属性に対する〈確認・記述〉を表せるが、テイル形で属性に対する〈確認・記述〉を表せない。例えば、(67) のように「怒る」はル形で経験者の「人間」の属性に対する〈確認・記述〉を表すのに対し、テイル形では「人間」の属性に対する〈確認・記述〉を表さない。(68) も同様である。また、(69) のように「イライラする」はル形で感情対象の「朝の渋滞」の属性に対する〈確認・記述〉を表すのに対し、テイル形ではその属性に対する〈確認・記述〉を表さない⁽⁶⁾。(70) も同様である。このように、タイプ I～IV の心理動詞はル形で経験者または対象の属性に対する〈確認・記述〉を表せるが、テイル形では表せない。

(67) 人間は失礼な言動に {怒る / *怒っている}。 (作例)

(68) 人は死を {恐れる / *恐れている}。 (作例)

(69) 朝の渋滞は {イライラする / *イライラしている}。 (作例)

(70) 国産は {安心する / *安心している}。 (作例)

次に、タイプ V について見る。タイプ V はル形の場合は澤田 (2012) が述べたように、知覚対象を主題化して属性を表すことが可能である。例えば、(71) は「このバイオリン」の「いい音がする」という属性に対する〈確認・記述〉を表している。(72) も同様である。

(71) 「このバイオリンはいい音がしますね」 (澤田 2012 : 217)

(72) 雨の日はジメジメする。 (作例)

また、タイプ V の心理動詞のうち、「音がする」「声がする」は、「～ガシテイル」の形の場合、4 節で述べたように話し手の継続的な知覚を表すが、「～ヲシテイル」の形になると、澤田 (2012) が述べたように知覚対象の属性を表すようになる。例えば、(73) は知覚対象「この楽器」の「おもしろい音をしている」という属性に対する〈確認・記述〉を表している。

(73) この楽器はおもしろい音をしている。 (澤田 2012 : 204)

最後に、タイプ VI について見る。タイプ VI はル形でもテイル形でも対象の属性に対する〈確認・記述〉を表すことができる。まず、ル形の場合は例えば、(74) のように知覚対象である「納豆」を主題化してその「べとべとする」という属性に対する〈確認・記述〉を表すことが可能である。(75) の「スベスベする」も同様である。

(74) 息子「どうして納豆はべとべとするの?」。私「仲良しお豆がね、離れたくなーいって、くっつきたがるから」 (『月刊日本語』アルク)

(75) 「瀬戸物はすべすべするので、つい落してこわしちゃった。(後略)」

(『童話実作入門』後藤檜根)

また、テイル形の場合は例えば、(76) のように知覚対象である「小麦」の「葉」を主題化してその「べとべとしている」という属性に対する〈確認・記述〉を表すことが可能である。(77)

の「スベスベする」も同様である。

(76) 1・2年生は、学校農園で小麦の観察をしました。(中略)「藁はざらざらして、べとべととして

(77)「トマトはすべすべしている」 (www.mizuta-koinoki.jp/mizuta-youjien/kondata0206.pdf)

ただ、タイプVIの心理動詞はル形もテイル形も属性を表せるが、鈴木(2017)が指摘しているとおり、(78)(79)のようにル形のほうがやや許容度が下がる。

(78) 梨地織の布は {^(?)ざらざらする / ざらざらしている}。 (鈴木 2017 : 127)

(79) 樹液は {^(?)べたべたする / べたべたしている}。 (鈴木 2017 : 127)

6. おわりに

以上、心理動詞の各タイプにおけるテンス・アスペクトの特徴について見てきた。その結果、心理動詞を以下の六つに分けた。

表9 本稿における心理動詞のテンス・アスペクト体系

動詞の種類・語例・語数		テンス・アスペクト		アクチュアル(個別時)な事態					
		一人称			三人称			ポテンシャル(潜在時)な事態	
		スル	シタ	シテイル/ シテイタ	スル	シタ	シテイル/ シテイタ	スル	シテイル
I	感情:恐れる等(9) 感覚:頭痛がする(1)	※ 仮定(未来) (未来の自分を客観視する場合も含む)	確認・記述 (過去)	確認・記述 (現在/ 過去)	仮定 (未来)	×	確認・記述 (現在/ 過去)	確認・記述 (属性)	×
II	思考:思う等(16) 感情:恨む等(42) 感覚:疼く等(21) 知覚:感じがする(2)	①仮定(未来) ②表出(現在)							
III	思考:ひらめく等(3)	仮定(未来)	①確認・記述 (過去) ②表出 (現在)	確認・記述 (現在/ 過去)	仮定 (未来)	×	確認・記述 (現在/ 過去)	確認・記述 (属性)	×
IV	思考:分かる(1) 感情:驚く等(25) 感覚:渴く等(9) 知覚:見える等(3)	①仮定(未来) ②表出(現在)							
V	知覚:音がする等(6)	①仮定(未来) ②表出(現在)	確認・記述 (過去)	確認・記述 (現在/ 過去)	仮定 (未来)	×	確認・記述 (現在/ 過去)	確認・記述 (属性)	×
VI	知覚:ザラザラする等(14)	①仮定(未来) ②表出(現在)							

(表2の再掲)

このうち、タイプIは外的運動動詞(「降る」「止まる」など)と似ているように、ル形で未来に対する〈仮定〉を表し、タ形で過去に対する〈確認・記述〉を表し、テイル/テイタ形で現在または過去の〈継続性〉に対する〈確認・記述〉を表す。タイプIIは一人称のル形が未来に対する〈仮定〉だけでなく、現在の〈表出〉を表すこともできるという点ではタイプIと異なる。タイプIIIはタイプIIと反対に、ル形ではなくタ形で一人称の感情〈表出〉を表す。タイプIVはタイプIIIと似ているが、一人称のタ形だけでなくル形も〈表出〉を表すことができる。タイプVは上のタイプI~IVと違い、三人称の場合は成立しない。最後に、タイプVIは三人称の場合が成立しないだけでなく、シテイル形で属性を表すことができる点においてタイプI~

Vと異なり、静態動詞（「優れる」「聳える」など）と接近している。このように、心理動詞はテンス・アスペクトから見ると、均質なものではなく複数のタイプが存在するバリエーションであることが分かる。

注

- (1) 西尾（1972）、南（2002）で指摘されているように、二人称の場合はほぼ質問文で使われるため、本稿では一人称と三人称のみを見る。
- (2) 感覚動詞の場合も次の(80)のように三人称の感覚をスル形で仮定として述べる用例が見られるが、「？彼は頭痛がするよ」「？彼はきっと体がゾクゾクするよ」などが言いにくいように、感覚は感情よりも三人称の内的領域としてスルでは述べにくいと思われる。
(80) おばあちゃん家の梅干☆めちゃでかいYO（笑）
梅干大好きなわたしもさすがに1個でギブです。すっぱすぎる… 食べながらこれ亀ちゃん絶対食べられないだろうな。とおもいましたね。きっと手が震えるよ？
(<http://j-17happiness.jugem.jp/?month=200608>)
- (3) 工藤（1995）では2節で述べたように、ル形は能動的な〈態度表明〉と受動的な〈感情・感覚表出〉を表すと指摘しているが、「能動的」と「受動的」を形式的な基準で区別しておらず、違いが曖昧であるため、本稿では両者をいずれも「表出」とする。
- (4) 本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』、Google ブックスおよびウェブ検索で例文を収集した。
- (5) 例(46)のように心理動詞が未来を表す場合、条件節と共起する例が多く見られる。その理由としては、「*明日雨が降る」は成り立ちにくいのにに対し、「明日低気圧が接近すれば、雨が降る」は成り立つように、非意志的な動詞は条件節と共起すれば未来を表しやすくなるということから、心理動詞のような話者の意志によってコントロールしにくい動詞も未来を表す場合には条件節と共起する例が多く見られるということが考えられる。ただ、条件節は基本的に「PならばQ」という時間を超えたところで成立することを表すため、心理動詞はこの構造に支えられて消極的に未来を表していると思われる。
- (6) 本稿では経験者の属性を表す場合と対象の属性を表す場合をあわせて属性を表す場合としているが、経験者の属性はすべての心理動詞が表せるのに対し、対象の属性は一部の心理動詞しか表せない。例えば、(81a)では「怒る」も「腹が立つ」も経験者である「人」の属性を表せるが、(81b)では「怒る」は対象である「失礼な言動」の属性を表せないのに対し、「腹が立つ」は対象である「失礼な言動」の属性を表せる。どのような心理動詞は対象の属性を表せるかについては今後の課題とする。
(81) a. 人は失礼な言動に {怒る／腹が立つ}。
b. 失礼な言動は {*怒る／腹が立つ}。

参考文献

- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房
- 澤田浩子（2012）「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」影山太郎（編）『属性叙述の世界』pp.203-219、くろしお出版
- 鈴木彩香（2013）『属性叙述文の統語的・意味的分析』筑波大学博士学位論文
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 南不二男（2002）「談話の性格と人称制限」『近代語研究 11』武蔵野書院
- 山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院